

外泊訓練の重要性について～共有ノートの使用～

田村恭佑

専門学校 健祥会学園

Key word : 参加、家庭復帰、家庭内役割

【はじめに】

交通事故により眼球運動障害を呈し自宅退院が困難となった症例を担当した。外泊訓練を通し本症例及びご家族に情報収集を行い「共有ノート」を用いる事で自宅退院へと至った。その経緯を踏まえ、外泊訓練の重要性また作業療法士に必要な介入について以下に考察する。本報告は本症例またご家族に承諾を得ている。

【事例紹介】

60代女性。発症28病日当院入院。130病日退院。FIM120点。高次脳機能評価（CAT, TMT, MMSE）の結果、軽度の注意・記憶障害が疑われた。身体機能面は、交通事故で発症したと考えられる動眼神経麻痺による左眼瞼下垂・眼球運動障害がみられたが、麻痺・感覚・協調性は何れも障害を認めなかった。精神的側面は、「家に早く帰りたい」と落ち込まれる様子が観察された。夫と二人暮らし。主訴は「主婦業再開」であった。

【介入の基本方針】

入院一カ月経過後、高次脳機能を再評価するがカット値を下回る事はなかった。「眼瞼下垂」「眼球運動障害」は、前医にて「改善する見込みは低い」と診断されたが訓練に対する希望があった。作業療法では、自宅退院困難となっている問題点を抽出する目的で「課題指向型アプローチ」「外泊訓練」を中心に訓練立案を行った。眼球運動は、機能訓練に加え循環マッサージを提示するなど、ストレス緩和に対して介入した。

【経過】

課題指向型アプローチを行う際、気分の更なる落ち込みを危惧し、失敗体験を与える事は意欲の低下に繋がりがかねないと考えた。その為、コミュニケーションを密に取りながら、「掃除・洗濯」などニーズに添う内容を中心に課題を提供した。フィードバックは実施直後に行い、マイナス面の意見を先行するのではなく、賞賛する事を意識した。結果「今までできないと思っていたことができるようになって嬉しい」と訓練意欲へ繋がった。徐々に自信を取り戻されてきた段階で、外泊訓練を導入した。その際、再度ご家族へ病態に関する説明を行った。また「共有ノート」を作成し、「外泊訓練時の活動内容と、主観的・客観的な意見」「外泊訓練時に行ってほしい活動を作業療法士が記載し、それに対する結果」を記載してもらった。ご家族が記載しにくい内容は、作業療法士に対し後日口頭で情報共有する様に依頼した。結果、特に「調理場面」において、注意が散漫になりやすいといった新たな問題点が浮上した。その為、調理訓練を行い注意散漫となりやすい場面を抽出し、問題点の解決を図ろうと試みた。実施する中で「次に優先して行う行動」を選択する際に、混乱が生じる場面があった。代償手段として、調理過程において聴覚性記憶のみではなく、メモをする・張り紙をし確認したことをチェックしていくなど視覚性記憶を加える環境を調整した。定着までに時間は要したものの、前述した問題点は解決することができた。提供した代償手段に関して、ご家族へ指導を行い外泊訓練で観察してもらった。入院約2カ月目、ご家族より「メモを見ながらテキパキと段取り良く行えている。」とあった。その後、外泊訓練を繰り返し実施するが、新たな問題点が浮上しなかった為、退院に至った。

【考察】

自立度の高い本症例に対し、院内で浮上しなかった問題点を抽出する目的で課題指向型アプローチや外泊訓練を実施した。その際、「共有ノート」を使用した事で、実施直後の様子を確認し合えたことや、直面した問題点を早期からアプローチする事ができたこと。また、記載している確認する事で、本症例・ご家族ともに現在の状況を知る手がかりとなった。以上の事が、本症例が自宅退院に至った要因であると考えられる。